

漫画でも福音を

くまじ ひでのり

熊井 秀憲

少年は、漫画やキャラクターものが大好きだった。ところが、ご両親は「漫画は一切買わない」という方針だった。テレビも、自分が見たい番組はまず見せてもらえない。親の厳しい言いつけには逆らえない。しかし、どうしても漫画は読みたい。

そこで少年がしたのは、店頭での立ち読みだった。学校から家に帰るまでの間に毎日なんと3時間、ストーリーを覚えてしまうくらいに読みあさった。一年生から四年間、毎日である。

○漫画しか考えられない

大学での専攻は経営学だったが、仕事としては漫画しか考えられなかった。卒業後に勤めたのは漫画の企画やストーリー作り、またそこから発展しておもちゃ作りをしている事務所、大学の先輩の関係からだった。

大好きだった漫画を仕事にしてしまったが、あるキャラクターは日本人なら知らない人はいないほどのブランドになった。熊井秀憲さんの半生を短く表現するとこのようになる。

10歳で教会に行き始め、大学生だっ

た20歳で洗礼は受けたものの、「今考えると信仰的には未成熟で、30歳になってようやく落ち着いた」と言う。

ちなみに、熊井さんは出席する教会の牧師の娘さんと結婚した。

○漫画でも福音を

商業誌で漫画を描いてはいたが、「自分はクリスチャンとしてどういう使命をいただいているのか、何を追求していくべきか」と模索していた。知人の中には、「クリスチャンなのにそんな仕事をして」といったニュアンスのことを言う人もいれば、「漫画が伝道のために用いられたらいいね」とも言われた。

漫画が伝道の役に立つという発想は最初はなかったが、神さまはまれな賜物を放つてはおかなかった。

その頃、新生宣教団（埼玉県）では、漫画を使って伝道をしようという熱心なプロジェクトがあった。

漫画原作を手がけるクリスチャンということで、熊井さんにも協力の依頼があった。熊井さんは、頭の中で作り出した架空のストーリーではなく、現実の物語を漫画にしたいという思いがあった。クリスチャンでよい働きをしている人の実例を題材としたノン

フィクションである。

出来上がったのが、『小さないのち 辻岡健象牧師の証より』（作画：片岡契一）である。

「小さないのちを守る会」は、望まれない妊娠をした女性とその子どもを守り、出産までの導きをし、自分で育てられない場合はクリスチャン夫婦に養子として出す一連の流れを仲立ちするキリスト教団体である。

『小さないのち』は、熊井さんが33歳のときの作品だ。辻岡牧師につきっきりで取材するうち、その働きに共鳴した熊井さんは、「もし育てる親のいないお子さんがいたら、ぜひ私にも」と依頼し、結果的には漫画の完成前に1人の養子が熊井家に来ることになった。

表紙をめくると、三浦光世氏の「推薦のことば」がある。「この頃なぜか、劇画漫画がわからなくなった。ほとんどおもしろいと思うことがない。……その私が、劇画『小さないのち』を見て、正直驚倒した。感動のあまり幾度も睨みが熱くなった。……凄いドラマである」

同じく新生宣教団で企画した『MANGA メサイア（英語版）』（絵：ケリー篠沢）の原案も熊井さんが担当した。これは、以後20か国語に翻訳され、累計部数は100万部を越えた（伝道用頒布版）。作画担当の女性漫画家の篠沢さんもクリスチャンである。

同書は後に、『みんなの聖書マンガ シリーズ1 新約聖書1 救世主（メシア） 人類を救いし者』（日本聖書協会）として発売された。

しかし、こういうキリスト教関係の出版物を紹介するよりも、『ポケットモンスターSPECIAL』（作画：真斗・山本サトシ）シリーズのシナリオ作者・日下秀憲（くさかひでのり）と言ったほうが、子どもたちには通りがいいはずだ。同シリーズは今も連載が続いている。

熊井さんは、長年勤めたプロダクションを2009年に辞めて、独立したばかり。世俗の仕事だけに埋没せず、営利目的から離れたところで、信仰のメッセージを含めた作品を制作し、また家族のためにも時間を有効に使うためだ。

聖書関連では、これまでに手塚治虫氏、ジョージ秋山氏、藤原カムイ氏などが漫画化を試みている。それはなぜか。（以下略）